

付喪神絵巻考——近世に広まった絵巻群に着目して——

村中 汐吏・目黒 将史

Theory of Tsukumogami-emaki

——Focusing on picture scrolls that were widely spread in the early modern period——

Shiori MURANAKA and Masashi MEGURO

一、はじめに

「付喪神」とは、『日本国語大辞典』「付喪神」項によると、「器物が一〇〇年を経過すると精霊が宿り、人に害を加えるという俗信から、その精霊のことをいう」とある。『時代別国語辞典 室町時代編』の「付喪神」項には、「百年を経た器物がなったという、人に害をなす神」と書かれている。どちらも、長い年月を経過した器物には力が宿って、人に害をなす、という点で共通している。妖怪や神についても詳しくなくとも、漫画や小説、アニメなどでも取り上げられることもあるため、「付喪神」の知名度は高く、長い年月を経た器物に靈魂が宿ったもの、と知っている人は多いのではないだろうか。しかし、「付喪神」は、作品によって神として扱われたり、妖怪として扱われたりと様々で、実は文献資料もあまり多くない。辞書には「人に害をなす」存在として説明されているが、必ずしも害を与える存在には描かれていないのだ。そんな謎も多い「付喪神」が取り上げられる絵巻物

が『付喪神絵巻』である。

『付喪神絵巻』とは、室町時代に成立したとされる、上下二巻構成の絵巻物だ。内容は、康保の頃（九六四〜九六八）、年末の煤払の日に捨てられた古い道具たちが人間への復讐を図って、妖物と変じ悪さをする。しかし、最後には改心し、悪行への反省から出家し修行に励んだ後、成仏を果たすという物語である。

これまで『付喪神絵巻』については、『百鬼夜行絵巻』と関連して言及されることが多く、『付喪神絵巻』そのものを対象とした研究は少ない。『付喪神絵巻』には最古の絵巻である崇福寺本と、江戸時代に流布した絵巻群という二系統が存在する。先行論において、崇福寺本を第一系統とし、江戸時代の絵巻群を第二系統とされ、どちらが先に成立したかについては議論が分かれている(1)。ただし、最古本ということもあり、崇福寺本を中心に『付喪神絵巻』について語られることが多い。また、江戸時代書写の絵巻群は十数本ほどが知られているが、それぞれの中身にほとんど違いはないと端的にまとめられること

が多く、絵巻ごとの特徴に注目する研究は少ない。現存最古の絵巻を研究することは重要であるが、流布した絵巻を顧みることも必要ではないだろうか。流布したということは、それだけ人々に読まれた絵巻であるということになる。江戸時代の絵巻群には、崇福寺本にはない、人々に読みたい、読ませたいと思わせる特徴があると考えられるのだ。本稿では、これまでひとまとめにされてきた近世期に書写された絵巻群に着目し、『付喪神絵巻』について考察していく。

二、諸本について

『付喪神絵巻』の諸本の系統について、齋藤真麻理によると、

『付喪神絵巻』のテキストは二系統に分類することができる。

第一系統は実隆の日記からやや下る十六世紀の作で、現蔵者の名を冠して崇福寺本と称される最古の絵巻である（中略）これに対して、『付喪神絵巻』の第二系統として江戸時代の模写絵巻群がある。（中略）これらの模写本の多くは寛文六年（一六六六）に頼業という人物が書写した旨の奥書があり、本文や挿絵には早稲田大学本を除いてほとんど差がない。しかし、崇福寺本とは挿絵が大きく異なり、本文の構成等にも差が見られるから、両系統では成立過程が異なると考えられるが物語の顛末にそれほど甚だしい違いは認められない。

とする(1)。まさにこれまでの研究成果をまとめたものと言えるだろう。齋藤らの先行研究をもとに、新たな諸本一覧を示してみた(2)。

凡例について、内題もしくは所蔵者登録書名などによる書名で立項し、参照できるテキストのある場合は、「翻刻・影印」を付した。大学図書館のホームページなどで閲覧できる場合は「HP」に示した。

第二系統は「寛文六年本奥書」のあるものとないに分けた。また、

各伝本に略称を示しており、以下その略称で呼ぶこととする。

『付喪神絵巻』の諸本

〈第一系統〉

○崇福寺本…崇福寺蔵『非情成仏絵巻』（二軸）

「翻刻・影印」真保亨・金子桂三『妖怪絵巻』（毎日新聞社、一九七八年、カラー図版）、奥平秀雄『御伽草子絵巻』（角川書店、一九八二年）

〈第二系統〉

〈寛文六年本奥書あり〉

○京大本…京都大学付属図書館蔵『付喪神』（二軸）

「翻刻・影印」『京都大学蔵むろまちものがたり』第十巻

「HP」京都大学貴重資料デジタルアーカイブ、国文学研究資料館「国書データベース」

料館「国書データベース」

○国会本（二）…国立国会図書館蔵『付喪神絵』（二軸）

「HP」国立国会図書館デジタルコレクション、国文学研究資料館「国書データベース」

料館「国書データベース」

○日文研本…国際日本文化研究センター蔵『付喪神絵詞』（一軸）

「HP」国際日本文化研究センター絵巻物データベース

○成蹊本…成蹊大学図書館蔵『付喪神記絵巻』（二軸）

「HP」成蹊大学図書館貴重書画像データベース

○東博本…東京国立博物館蔵『付喪神絵詞』（二軸）

「HP」東京国立博物館画像検索

〈寛文六年本奥書なし〉

○国会本（一）…国立国会図書館蔵『付喪神記』（一軸）

「翻刻」『室町時代物語大成』第九巻

「HP」国立国会図書館デジタルコレクション

○彰考館本・徳川ミュージアム彰考館文庫蔵『付喪神記』（一軸）

〔翻刻〕横山重『室町時代小説集』（昭南書房、一九四三年）

○早大本・早稲田大学図書館蔵『付喪神絵詞』（一軸）

〔影印〕中野幸一『早稲田大学蔵資料影印叢書 国書篇』第十

九卷（早稲田大学出版部、一九九一年）

〔HP〕早稲田大学図書館古典籍データベース

〈未調査〉

○京芸本・京都市立芸術大学芸術資料館蔵『付喪神絵詞』（二軸）

○国会本（三）・国立国会図書館蔵『付喪神』（一冊）

○岩瀬本・西尾市立図書館岩瀬文庫蔵『付喪神記』（二軸）

〈所在不明〉

○思文閣本・『思文閣古書資料目録』第二百二十四号『付喪神記絵

巻』（二軸）

○横山本・横山重旧蔵（『付喪神記』、宇喜多一蕙画、一冊）

〈使用テキスト不明〉

〔翻刻〕平出鏗二郎『室町時代小説集』（精華書院、一九〇八年）

鷲尾順敬『国文東方仏教叢書』第一輯第九卷・文芸部上

（名書出版、一九二六年）

内海弘蔵『新釈日本文学叢書』第二輯第七卷・御伽草子

集（内外書籍、一九三〇年）

これらのうち、京芸本、国会本（三）、岩瀬本、思文閣本、横山本は未見である。また、横山本は、眞真理子や柴田芳成の論考でその名称は出てくるが、いずれも未見であるとしているため、その系統は不明である。

『付喪神絵巻』は、突出して古い崇福寺本一点のみの第一系統と、江戸時代に書写されたと思われる絵巻群である第二系統に分けられて

きた。しかし、第二系統は、物語の内容に大きな違いはないが、詞書の異同や欠落、挿絵の描かれ方の違いなどを精査してみると、成立過程が異なるのではと考えられる点がいくつか浮かび上がってくる。本稿では、「江戸時代に書写された絵巻」と一括りにされる伝本を丁寧に見る必要性を指摘し、第二系統の重要性を明らかにする。そのためにまずは第一系統である崇福寺本と第二系統の例として京大本を挙げて比較していく。京大本を取り上げた理由としては、欠落がなく原本の画像と翻刻が閲覧できるためである。また、早大本はこれまで第二系統とまとめられてきたが、第二系統の中でも特殊な本文・絵画を持つ伝本である。それは誤写レヴェルの問題ではなく、書写者の意図をもった改編と考えられる。そのため、第二系統内でも、京大本と早大本を取り上げて、比較を行っていくことにする。また、早大本は上巻しか現存していないため、上巻部分の比較のみにとどまった。

本稿において用いるテキストは、特にことわりがない場合、第一系統は崇福寺本（真保亨・金子桂三『妖怪絵巻』毎日新聞社、一九七八年）、第二系統は京大本（京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学蔵むろまちものがたり』第十卷、臨川書店、二〇〇一年）を用いた。また早大本に関しては、早稲田大学図書館古典籍データベースにより画像を確認し翻字した。引用に際して、旧字体は現行の字体に直した。私意に濁点、句読点、ルビを補った。また、踊り字は開いた。

三、崇福寺本と京大本との比較

まず、上巻の第一段の冒頭について見ていくことにする。冒頭部分はほとんど同じであるように思われるが、一部異なっている部分があり、崇福寺本の第一段末尾には京大本にはない記述がある。崇福寺本の該当部を引用してみる。

又あら玉のはじめには、榆柳ゆりやうの火を鑽きり、新水をむすび、衣裳、家具等にいたるまで、みなあたらしく声花なる事、ただ富貴の家を、をくれるより、おごりたるかと思侍れば、かの付喪神をつつしみて、新を賞じけりとは、いまこそおもひあわせて侍れ。されば、人はみな、高もいやしきも、年のくれにわやま、ふるきをおさめ、春のはじめには、あたらしき物を用給なば、いく千とせまでも、つつがなくめでたかるべき物をや。

冒頭部によれば、道具が百年を経ると魂を得て付喪神となる。そうした道具の化け物の災難に合わないために煤払いを行うのである。また、新年の始めに衣裳から家具に至るまですべて新しくすることは、もともと富貴の家から始まったものであるが、付喪神に用心するためだと合点がゆく、と述べられている。ゴチになっている部分が、崇福寺本と京大本で異なる部分である。そして、傍線部が京大本にはない記述である。

相違点を見ていきたい。引用文の「新水」は、京大本では「若水」と書かれている。『時代別国語辞典 室町時代編』わかみず「若水」項には、「本来宮中で立春の日に、主水司から天皇に奉られた水。のち、一般に正月元旦に汲む水を祝つていう」とある③。『時代別国語辞典 室町時代編』では、「新水」を確認することはできなかったが、音が同じで、似た漢字を用いる用例として「薪水しんすい」が見える。この項には、「日常生活に最小限不可欠である、たきぎと水、また、たきぎを取り、水を汲むこと。また、そうして営まれる、つましい日日の暮しをいう」と載せられている。また、『日本国語大辞典』の「新水」項によると、「春先の雪解け水」とする。新年の初めに行うことについて述べられているため、ここでは「新水」や「薪水」よりも、「若水」が適切であると考ええる。

崇福寺本の上巻・第一段末尾の京大本に見えない部分に関しては、

年の終りには古いものを収めて、新しいものを使うと述べられているだけで、ちよつとした付け足しのように思える。この部分がなくても、次の段の内容へ入っていくのに、支障はないのかもしれない。

上巻第二段、第三段の場面では、捨てられた古い道具たちが、妖怪となって仕返しをしようと企てる。数珠の一連入道は止めようとするも、手棒の荒太郎に打たれて追い払われる。古い道具たちは古文先生に、陰陽が入れ替わる節分に命を捨てれば、造化の神が妖怪にしてくれると教えてもらうという展開が続く。

第三段については、柴田芳成により、崇福寺本が古文先生中心に、京大本が一連入道を中心に、物語が進む展開であるという指摘がある④。改めて確認してみよう。崇福寺本では第二段において、捨てられた道具たちの会議、その悪巧みを止めに入った一連が追い出されて出家したことまでが描かれる。そして、第三段では、再び物語を会議の場に戻して、古文先生が造化の神に身を任せれば妖怪に変じることができると説く。それに対して、京大本では第二段で一連が追い出された後、古文先生の語りによって、妖怪となる手はずを整えるまでをまとめて描く。そして、第三段に追い出された一連の無念が告白されている。一連が出家したことは、上巻の時点では明確に描かれていない。第二段と第三段では、数珠の一連入道が追い払われた状況を描く順番が異なっていること、京大本にない記述が崇福寺本にいくつあること、という違いがある。

崇福寺本では、一連の登場から退場後までを第二段で一氣に描いている。一連はこれ以降、下巻の中盤に至るまで出番がない。一連の退場後、第三段は古文先生の語り始まり、第四段は古文先生の教え通りになると妖怪になることができたという場面に続く。いよいよ妖怪へと変化した場面で、物語が動き始める場面でもあるため、読者の印

象に残りやすいだろう。すると、登場から退場までを第二段の後半で一気に終わらせ、退場してしまつた一連のことはあまり記憶に残らないのではないだろうか。

第二段では、名前が付けられ、一連を打って退場させるという大役を担うものの、後半に一行ほどの出番しかない「手棒の荒太郎」もいる。古文先生も活躍は第二段で終わっており、第三段では名前が出てくるのみである。名前が付けられている妖怪が活躍するのは、第二段が主である。そのため、これ以降後半まで出番のない一連の印象は、より薄くなる。

一方で京大本では、第二段で一連を会議から退場させた後、第三段に退場させられた無念さを嘆く一連の様子を描く場面が入る。一連の情報を小出しにしているのである。加えて、第三段丸ごと使つて一連の様子を描いているため、一連はこれ以降描かれなくなる。荒太郎や古文先生と描かれ方の異つた存在である。これらのことから、柴田芳成の意見と同様に、第二系統である京大本は物語の流れを踏まえて整えられた構成になっていると考える。

京大本では第六段であるが、崇福寺本では第五段に当たる部分で、七言絶句の漢詩が二題四種みえる。一方の京大本では一題二種のみとなっている。次に京大本にみえない、「変化物」と題された漢詩を用ずる。

次韻、題変化物二首

春風花下詠詩来	万葉紅粧染雪開
奇語詔光莫相背	此生改变旧塵埃
化魂相樂欲酬春	孰与邯鄲夢裡人
好認清香為酒伴	仙桃醉露小紅脣

此外、囲碁、双六、鞠に、弓にいたるまで、のころとこころなく奥をつくしてぞ遊び戯ける。

引用は割愛したが、「花題」と題する二首もある。その第一首目には、玄宗氣取りで鞞鼓（雅楽で使われる打楽器）を奏でると、花が一斉に咲いた。もう古道具には戻らないと詠つている。第二首は、一度の夢やその夢を見る間の短い時間をいう「一夢」という語句から、儂さを感じる句である。「変化物」と題された漢詩も同様の解釈ができる。第一首も、花の第一首と同様に、もう古道具という存在ではないことを主張しているのだろう。

第二首もまた、「邯鄲夢（人の世の栄枯盛衰のはかないことのとたとえ）」という言葉から儂さが感じられる。「邯鄲夢」は『閑吟集』や『太平記』に用例がみえ(5)、いわば中世における韻文の常套的な表現と指摘できる。花題と変化物題の第一首と第二首では同じ韻を使用しており、編者は漢詩に精通していたのではないだろうか。そして、読者もこうした叙述を受け入れることで、物語だけではなく、漢詩にも興じているのではないだろうか。傍線部にあるように、漢詩も様々な遊びの中のひとつとして、妖怪たちが興じている。いわば、そのような遊びの空間を持つ読者層が、想定できるかどうかということである。

上巻を主に比較すると述べたが、崇福寺本と京大本で最大の違いが、上巻後半から下巻の前半にわたっているため、下巻の前半も比較していく。その違いとは、京大本では上巻・第六段中盤から第七段、下巻第一段にかけて描かれている場面が、崇福寺本には欠けており、ないのである。京大本の該当場面を挙げる。

京大本・上巻・第六段中盤

或時妖物の中に申ければ、夫吾朝は本より神国にて、人みな神道を信じたてまつる。我等すでに形を造化神にうけながら、彼神をあがめたてまつらざる事、心なき木石のごとし。今よりして此神を氏神とさだめて、如在礼奠をいたさば、運命ひさしく保て子孫繁昌せむ事うたがひあらじとて、やがて此山の奥に社壇をたて

て、その名を変化大明神と号したてまつる。立烏帽子の祭文の督を神主とし、小鈴の八乙女、手拍子の神楽男などさだめをきて、朝にいのり夕にまつり申事、猛悪不善の妖物とは申ながら、信にかたぶくころさし、かの盗跖が五常の法に相似たるかな。

京大本・上巻・第七段

余社の法例に准じて祭礼おこなふべしとて、神輿を造立したてまつる。ころは卯月はじめの五日、深更にをよびて一条を東へみゆきなす。山をつくり。梓をかざる。さまざまの風流、美をつくし、善をつくせり。

時に閔白殿下、臨時の除目おこなはれんがために、一条を西へ達智門より御参内ある所に、件の祭礼行あひたまへり。前驅の輩、馬より落て絶入す。そのほかの供奉の人々、みな地にたふれふす。されども殿下はちともさはざましませず、御車のうちより化生のものを、はたと睨たまへり。不思議なる事には、はだの御守より、忽に火炎をいだす。其火炎無量の火村と成て化生の者に負かゝる。化生の者、まろび倒て逃うせにけり。

京大本・下巻・第一段

今夜、路次のさはぎによりて御参内事ゆかずかへりたまひぬ。未明にこのよし奏聞せらる。主上おほきに御おどろきありて、やがて御占をこなはる。占文のさす所、御慎軽からざるよし奏しければ、諸社の奉幣、顕密の御祈禱、はじめらるべきよしさだめらる。

抑、昨夜殿下の御まもりの奇特をたづぬれば、なにがしの僧正、御師壇たるによりて御守のために手づから尊勝陀羅尼を書、供養して進ぜらる。御身をはなたせ給はずしてかけられける。そのしるしにてぞ侍りける。主上も此よしきこしめし、今度の御祈は、しかしながら彼僧正にまかすべきよし仰くださる。再三辞申

さるるといへども、勅定そむきがたくして、すなはち清涼殿にをひて、如法尊勝の大法をこなはる。伴僧廿口、みなこれ一門の秀才、瑜伽教の達者なり。護摩のけぶり禁中に薫じ、念珠の声、禁裏をひびかす。

しかるに第六日の後夜の時に、御聴聞のために主上出御なるとて、御殿の上を御覧せらるるに、赫変たる光明あり。その中に奇異なる天童七八人、或は剣を提、或は宝棒をかたげて立けるが、同時に北をさして飛去ぬ。是則二明王の眷属、悪魔降伏のために現じ給ふらむと、渴仰の御涙、叡襟をぞうるほしける。

すなはち御聴聞所へ出御なり、本尊を拝しまし、結願の後、御布施の儀式はてて、阿闍梨を御前ちかくめされ仰くだされけるは、真言道の奇特、今にはじめぬ事なれども、今度の効験、しかながら僧正が練行の功よりおこりたるよし勅定ありければ、仏法を貴みおぼしめす叡慮のかたじけなきに、僧正、涙に咽て御前をぞ出られる。

京大本・上巻・第六段の叙述は、古い道具たちを妖怪に変えてくれた造化の神を変化大明神として祀る場面から始まる。第七段は、妖怪たちが祭礼の行列をしているところに、閔白が参内の途中で鉢合わせをする。恐ろしい妖怪たちに閔白のお供は地面に倒れ伏すが、閔白は動じず、にらみ返し、持っていたお守りから炎が噴き出し、妖怪たちを追い払う。下巻の第一段は、閔白が持っていたお守りには、尊勝陀羅尼という呪文が書かれていたことから、その呪文を書いたという僧正に、清涼殿にて祈禱を行ってもらうことになった。ある時、天皇がその場を訪れる。すると護法童子が現れ、飛び去っていった。天皇はその加護に涙する。崇福寺本には、これら一連の物語が描かれない。妖怪を追い払う力を持っていた「尊勝陀羅尼」とは、読経や書写することで様々な功德があるとされものである。そうした中で、「尊勝

陀羅尼」がお守りとして機能する話に、『今昔物語集』巻十四・四十二話「依尊勝陀羅尼験力遁鬼難語」がある。これは藤原常行が百鬼夜行に遭遇する話である。常行の乳母が衣の襟首に「尊勝陀羅尼」を縫い付けてくれていたため、その験力で命拾いをしたとされる。話末評では、この話を聞いた人々は、さらに信心を深め、「尊勝陀羅尼」をお守りを持ち歩いたとする(6)。関白が「尊勝陀羅尼」と書かれたお守りを持っていた『付喪神絵巻』と異なり、常行はお守りを直接持っていたわけではない。また、「尊勝陀羅尼」から炎が出てもない。しかし、「尊勝陀羅尼」の力が、百鬼夜行、妖怪を退けてくれたという点は同じである。

第二系統では、「尊勝陀羅尼」説話を挿入することで、仏教の偉大さ、さらなる信仰を説いているのではないだろうか。関白がただ妖怪に恐れずにいるだけでなく、「尊勝陀羅尼」の力で妖怪を追い払い、さらに、お守りに「尊勝陀羅尼」と書いてくれた僧正が、「如法尊勝の大法」を祈禱する。そして、護法童子が出現し、天皇が感涙を流すという展開から、仏法による鎮護国家の物語へと発展している様相が垣間見られる。関白という存在もまた国の要として機能しているであろう。

さて、ここまでは叙述の大きい欠落などに注目してきた。これらは先行論でも指摘されてきた内容である。ここからはさらに丁寧に本文を精査してみたい。祭礼・参内場面に続く京大本・下巻・第二段と、妖怪となった道具たちが宴を開いて盛り上がった後の崇福寺本・下巻・第一段の場面を引用する。崇福寺本と京大本とで、脱文や増幅とされる箇所にごちや傍線を引いてある。

崇福寺本・下巻・第一段

さる程に、護法童子、化生の物の城へ飛うつりて、忽に降伏し給ふ。輪宝、虚空に転じ、火炎、身をせむ。汝等もし

生命を害せず、諸人をなやます事なくして三宝を帰依し、つゝに菩提を証せんとおもはば、只今の命をたすく「脱文？」へきよしの給へば、変化の者共、ふかくつしみて、おのの各かたがたく誓約して、彼の教誡にしたがふ。

ありがたきかなや。無縁の大悲へたつるところなれば、魔党をもすて給はず。彼等が命をたすけて、つゝに仏道に引入、菩提の宝珠をあたへてかへり給ふ事よ。可貴可信。

京大本・下巻・第二段

さる程に案のごとく、護法童子、化生のもの城へ飛うつり、忽に降伏したまふ。輪宝虚空に転じ、火炎、身をせむ。汝等もし生命を害せず、諸人をなやます事なくして三宝を帰依し、つゝに菩提を証せんとおもはば、ただ今の命をたすくべし。しからずは悉降伏すべきよしのたまへば、変化の者ども、ふかくつしみて、をそれて、かたく誓約申て後、教誡にしたがひけり。

京大本では、下巻・第一段において、先に確認した「尊勝陀羅尼」の功德が語られ、その効能が認められ、「如法尊勝大法」を行ったことにより、天皇のもとに護法童子が現れる。妖怪たちの祭礼、その祭礼場面に出くわした関白が天皇に奏上し、祈禱により護法童子を呼び出すという展開である。この場面は崇福寺本にない。そして、下巻・第二段で護法童子が妖怪たちを降伏させることになる。しかし、崇福寺本は悪行を尽くした妖怪たちが宴を楽しんだ上巻最後の場面から、下巻最初の場面で護法童子が突然現れ、妖怪たちは調伏される。人間に悪さをしたから降伏させられるという勧善懲悪のおきまりパターンではあるが、護法童子の出現は唐突であろう。

冒頭にある「さる程に」という言葉には、話題を転ずるときや新しい話を切り出すときに使う「さて」という用法と、これまでの展開に関連して、「そうする間に」ということを指す意味がある。京大本の

下巻第二段の最初にある「さる程に」は、護法童子が飛び去って妖怪たちの前に現れた場面であるため、新しい話ではなく、「そうしている間に」という意味合いが正しいだろう。一方で、崇福寺本の下巻第二段の最初にある「さる程に」は、上巻から下巻に移動しているため、話題を転じるときに使われる用法だろう。新しい場面であることを示す「さて」があることによって、好き放題していた妖怪たちが懲らしめられる場面に入ったと読者は思うことができる。

京大本は「さる程に」に加えて、「案のごとく」と続く。「案のごとく」には、「考えていた通り、案の定」といった意味がある。京大本の下巻第一段で、護法童子が現れ飛び去っていったのを見た天皇が、彼等は妖怪たちを降伏させるために出現したという。そして、天皇が祈禱した僧正を褒めて第一段は終わり、下巻・第二段に続く。「そうしている間に案の定」、護法童子は妖怪を降伏させに行ってくれていた。崇福寺本には、「案のごとく」が書かれていない。京大本の下巻第一段に当たる場面が崇福寺本にはないため、「さて」と場面が変わったところで「案の定」と続くには違和感がある。「案のごとく」が消されたのか、付け足されたのかはわからないが、崇福寺本と京大本とそれぞれに合った詞書が作られていることがわかる。

また、崇福寺本の途中に脱文していると思われる箇所がある。引用文のゴチの箇所である。京大本では、降伏した妖怪たちは、護法童子に悟りを開くならば命だけは助けてやると言われた後、「反省しなければ残らず調伏してやる」と書かれている。崇福寺本は、「悟りを開くなら命だけは助けてやる」と、護法童子が言うだけで、「調伏してやる」とまでは書かれていない。崇福寺本には、前段に見えた天皇のもとに護法童子が現れる場面がないため、京大本の「べし。しからずは悉降伏す」はあつてはならないと、判断されたと考えられる。

以上のことをまとめると、崇福寺本は、京大本・上巻・第六段中盤

から下巻・第一段に当たる場面がないことを前提に書かれているように思える。しかし、護法童子がなぜ現れたかの説明がないため、やはり護法童子の出現には疑問が残る。崇福寺本にもともと該当場面がなかったのか、何らかの理由で欠落してしまったのかはわからない。ただ、話の構成としては京大本の流れのほうが、崇福寺本より自然であると考えられる。

第一系統と第二系統では、第一系統に「祭礼場面から護法童子出現までの場面がない」点以外で、話の流れや内容に大きな違いはない。しかし、細かく見ていくと、異同や脱文、改段整理が行われた場面がある。絵画も妖怪たちや一連の描かれ方が異なっている(7)。

これまでの先行研究では、第一系統と第二系統は叙述の相違点から、第一系統と第二系統という分類が行われるとともに、どちらが先に成立したかという議論が行われてきた。しかし、第一系統、もしくは第二系統が先に成立して、もう一つの系統が生まれたのだろうか。これらには共通の祖本(いわば第零系統)があつたと考えるのが妥当だと考える。崇福寺本は欠落場面に合わせ物語が展開するように、京大本は話の構成がわかりやすくなるように、それぞれの系統へと別れていったとも考えられるのではないだろうか。例えば、護法童子が妖怪たちを懲らしめる場面に注目すると、崇福寺本が先に成立したとすれば、崇福寺本にある脱文を京大本は増幅したとなる。妖怪を降伏させる目的のために現れた護法童子に合わせた詞書にしたとも考えられる。

京大本の増幅部分をもう一度見てみよう。「たゞ今の命をたすくべし。しからずは悉降伏すべきよし」のゴチ部分が、崇福寺本にはない記述であり、まるで穴埋めのような増幅である。では、第二系統が先に成立したと考えると、傍線部は脱文した、もしくは意図的に削除したと考えられるが、なぜ祭礼場面から護法童子出現の場面を大幅に削

除したのかという疑問が残ることの指摘としては妥当であろう。

この部分だけで、第一系統と第二系統に共通の祖本があると決めつけることはできないが、どちらかが先に成立したという観点のみで議論をするのではなく、もう一つの視点を持って諸本分類を行う必要がある。少なくとも、第一系統と第二系統のどちらが先に成立したとしても、それぞれに解消できない疑問がある。それぞれの根拠を調べ、深めていくことも重要であるが、そのどちらかにしか答えがないと考えず、違う可能性への議論を広げていく必要があるのではないだろうか。

四、第二系統における早大本の位置づけ

第一系統である崇福寺本と、第二系統として取り上げた京大本には、詞書や絵など様々な違いがあることがわかった。では次に江戸時代に流布した第二系統の絵巻ごとの相違について検討してみたい。すでに柴田芳成により、京大本と早大本との相違点については指摘があるものの、先行論においてほとんど違いがないという認識が大勢を占める。結論から先に言うと、早大本は同系統とひとまとめにするには他と異なる点が多い。その早大本との相違をみていくことにする。

まず、早大本と他の第二系統の絵巻の挿絵の違いをみておこう。早大本と京大本の挿絵の違いとして、祭礼場面に大きく相違がある。道具である自分たちを妖怪にしてくれた造化の神を、変化大明神として祀り、祭礼を行っている場面である。神輿を担ぐ妖怪たちとその周り、神輿の前を歩いている妖怪たちの様子が描かれている。同じ祭礼場面を描いているが、色味や画風の違いだけでなく、行列に参加している妖怪たちの数も異なっている。また、神輿を担いでいる妖怪について、京大本では妖怪の種類に違いはみられない。しかし、早大本で

は、猿にみえるもの、鼻が長いものなど、描き分けられている。

次に国会本(一)と成蹊本の絵巻とも比較してみる。国会本(一)と成蹊本は、京大本と妖怪行列の数は変わらず、神輿を担いでいる妖怪の姿も同じである。京大本、国会本(一)、成蹊本には、大きな違いはないとわかる。つまり、絵画を比較してみるだけでも、早大本は、他の第二系統の絵巻とは、異なっていることがわかる。絵師や書写者が異なるために、画風や妖怪の描き方にも違いが出ていとも考えられるが、早大本と他の第二系統の絵巻にみられる相違は、妖怪の数など明らかなものであり、絵師や書写者の違いではありえない。

早大本が第二系統において、絵画に特色があることが判った。次に京大本と早大本との詞書と画中詞を比較していこう。すでに柴田芳成により、「第5図の位置を「詩は…」と始まる章段、及び二篇の詩の後に移動しており、章段分けにも改変整理がみられる」と指摘されている。「改変整理」の部分とは、上巻第五段後半から第六段前半である。京大本では、第五段第五図の挿絵の中に、「歌はこれ和田の風俗なり。いかでか六義の道にたづさはらざらん」に加えて和歌の画中詞がある。そして、第六段冒頭の、「詩はこころざしのゆくところなり。風月の才なくは、もとの器物にことならん」という詞書に続いて、漢詩二首が書かれている。一方、早大本では、京大本の第五図にあった画中詞が、第六図に書かれていることに特徴がある。そのため、早大本は、第六段に詩や和歌をまとめるという改変整理がなされているといえる。

また、京大本は、第六段の漢詩に続けて、変化大明神を祀る場面へと続いている。早大本は、段を変えて第七段に変化大明神を祀る場面が書かれているという違いもある。早大本が詩と和歌を一つの段でまとめている点には、読者への配慮が感じられる。詩や和歌をひとまとめで楽しんだ後、段を変えて再び物語が動き出すことで、詩や和

歌を単体でも詠んで欲しかったのではないだろうか。京大本は、詩や和歌を物語の一部と捉えている。早大本も同様に、詩や和歌は物語の一部でありながら、内容に直接関係するものではないが、さらに詩歌を際立たせる構成となっているのである。改変整理までしているということは、ただの写し間違えではないだろう。

加えて、早大本と京大本では、漢詩の部分に語句の異同もみられる。京大本の漢詩部分二首目、第三句に、「人似妖紅如一夢」とある。早大本は「人似」が「須傾」となっているのである。この部分に関しては、崇福寺本や他の第二系統絵巻でも「人似」となっている。「須傾」では文意不明のため、誤写の可能性があるが、転写の過程を明らかにする上で問題になる可能性がある。

また、上巻・第三段において、人間に復讐しようとする捨てられた道具たちを止めようとして追い払われた一連が、悔しくて仕返しをしようと考えている場面にも語句の異同がある。該当場面の京大本を引用してみよう。

此一連、道心者とは申ながら、余に無念にや侍りけむ、たちかへり鬱憤を散ずべきよし申せば、弟子どもひきとどめける程におもひつづけ侍り。

早大本は、「鬱憤」が「無念」と書かれている。この部分は、崇福寺本でも「鬱憤」、他の第二系統絵巻でも「鬱憤」とする。写し間違いつつも考えられるが、早大本の書写者が、意図して書き換えた可能性もあるだろう。『時代別国語辞典 室町時代編』「鬱憤」項によると、「鬱憤を散ず」とは、「何らかの報復行為をして、その人に対して心の中に憤っている怒りや不満を解消する」とある。「無念」項には、「無念を散ずる」とは、「復讐する、すなわち或る憎悪などを晴らす」とある。どちらも『太平記』に用例がある(8)。「無念」とする場合、受けた行為の悔しさや憎悪という気持ちを持らず、という感情的な面

が強い印象を受ける。「鬱憤」は、怒りや不満をつのらせて、仕返しをするという行為を重要視しているように捉えられる。

早大本の「無念を散ず」の意味でとると、一連は他の古道具たちを説得しようとしたが、荒太郎に打たれて古道具たちの会議から追い出されてしまったことを、たいそう悔しく思っている。悔しいからその恨みを晴らしたい、と感じているところを弟子にとめられると解釈できるのである。一方で、京大本の「鬱憤を散ず」の意味でとると、荒太郎に打たれてしまったから、一連自身も同じように荒太郎を打つてやりたい、もしくは古道具たちに説教でもしたいと感じているところを弟子たちになだめられていると解釈できる。どちらの意味でとることもできるだろう。ただ、一連は自分がされたことと同じことがしたい、もしくは他の行為で仕返しをしたいと冷静に考えているより、悔しいから復讐したいと単純に考えた方が、「弟子どもひきとどめける」につながりやすいと感じる。一連のことを引つ張つても弟子が止める程、一連の感情が高ぶっていた、とすると一連の悔しさをより感じることが出来る。早大本の書写者が一連の思いをより感情的に表現するために、「鬱憤を散ず」から「無念を散ず」へ、意図的に書き換えた可能性がある。

以上の相違から、早大本は、書写者が意図をもって書き換えた、別系統の絵巻と捉えることはできないだろうか。詞書と画中詞の京大本との相違は、写し間違いの可能性もあるが、「改変整理」されている部分は単なる間違いとは判断しづらい。「改変整理」をすることで、表現しなかったと考えるのが妥当だろう。そして、意図的に構成を変えたことができると、他の諸本との相違も、早大本の特徴の一つであると考えられることができる。絵画に関しては、画風や妖怪、人物の数など異なっている点が多い。そうした違いの中でも、牛車の御簾の上げ下げなどの閑白一行の場面は、意識的に他の諸本と描き分けられていると考え

られる。

第一系統、第二系統に加えて、新たに第三系統を立ち上げるには根拠に乏しい。しかし、「第二系統である江戸時代の絵巻群にはほとんど違いはみられない」と、ひとまとめにするには早大本だけ異なる点が多いのである。新たな系統を立ち上げるのではなく、第二系統の中で、京大本系、早大本系などのように、さらに細かく分類していく必要があると考える。

また、第二系統の絵巻は、本奥書として寛文六年（一六六六）に類業という人物が書写したと書かれている伝本が多い。京大本もその一つである。早大本は、下巻を欠くこともあるが、この本奥書がみえず、別に「嘉永元年（一八四八）守純」の書き入れがある⁽⁹⁾。本稿ではひとまず、寛文六年の本奥書があるか否かで諸本分類の可能性を探ることを提案する。

五、おわりに

室町時代作の『付喪神絵巻』には、最古の絵巻である崇福寺本のみの第一系統と、江戸時代に流布した絵巻群の第二系統が存在する。本稿では、これまで絵巻群とひとまとめにされることが多かった第二系統に着目して、諸本分類と『付喪神絵巻』テキストの展開に関する新たな考察を行った。

これまで『付喪神絵巻』は第一系統と第二系統のどちらが先に成立したかという議論が行われてきた。本稿では、第一系統と第二系統の比較を通して、第一系統には、欠落場面や第二系統との異同、脱文、改段整理などが行われた部分があること、絵画においても、妖怪たちや物が太刀の展開を担う「一連」の描かれ方が異なっていることを明らかにした。そして、第一系統と第二系統には共通の祖本があり、そ

の祖本から崇福寺本は欠落場面に合わせ物語が展開するように、京大本は話の構成をわかりやすくするように、それぞれの系統へと別れていったとも考えられる可能性を示した。

また、第二系統の中でも早大本が異質であることを明らかにした。早大本と他諸本の比較を通して、早大本は、詞書を書写者が意図をもって書き換えたと考えられる部分がいくつかある。特に「改変整理」は、ただの写し間違いとは考えにくく、意図的に構成を変えたと推測できる。絵画に関しても、画風や妖怪、人物の数など異なっている点が多い。そうした違いの中でも、牛車の御簾の上げ下げなどの関白一行の場面は、意識的に他の諸本と描き分けていると考えられる。こうした相違点から、これまで第二系統は、江戸時代の絵巻群としてひとまとめに考えられてきたが、第二系統の中で、京大本系、早大本系などのように、さらに細かく分類していく必要があることが明らかになり、テキストごとにおける「読み」の可能性が広がったと言える。

本稿では、他の仏教宗派の考え方との比較、和歌や漢詩の読み込み、助詞の相違といった細かい違いを論じきれなかった。また、第二系統で取り上げた早大本が上巻しか現存していないため、諸本比較も上巻が主となっている。これらのさらなる考察を行うことで、第二系統が近世に広まった理由の深堀ができるだろう。これらについては、今後の課題としたい。

六、付記にかえて

本稿は、二〇二二年度、国際文化学科、村中汐吏の卒業論文を、指導教員である目黒将史が論文の体裁に改稿したものである。この論文に関する一切の責任は目黒がもつこととする。卒論では絵画も引用し

て詳細に分析していたが、紙幅と掲載許可の観点から、本稿では絵画の掲載、および絵画の分析、論考を大幅に割愛させていただいた。

卒論ということもあり、未調査の繪巻も多い。また本来であれば、すべての本文を校合しなければならぬができていない。読みの浅い部分もある。活字化して世に出すには、まだまだ未熟な論考である。ただし、本論の中でも指摘しているが、『付喪神繪巻』は、最古の繪巻である崇福寺本のみが注目され、近世期に広まった繪巻群は十把一絡げに扱われてきた。繪巻の模本の重要性は楊曉捷によりすでに指摘されている⁽¹⁰⁾。近世に成立した繪巻にも、それぞれ固有の特徴があるはずだが、その伝本一つ一つが顧みられることは少なかったのではなからうか。その意味で本稿を学界に投じる意味は大きい。これは今年の説話文学会（二〇二三年大会・60周年記念大会、七月一日、於早稲田大学）のラウンドテーブル「説話文学研究 つぎの六〇年に向けて」をうかがって強く感じたことでもある。近世期に広まった繪巻群だが、広い意味では流布本と言えるだろう。流布本には流布本の良さがあるはずである。

また、本稿で新たな諸本一覽を提供できた。これは今後、『付喪神繪巻』を研究してみようという初心者にとって、とくに使いやすい諸本一覽をめざしたものである。今までの諸本一覽では底本が不明なものもあり、具体的にどのテキストにあればよいか、学部生レヴェルには易しくなかった。さらに現在、ネットでの作品公開が盛んに行われているなかで、かなりの伝本がネット上で確認できる。当然本物を見るにこしたことはないが、貴重な繪巻を学部生が手に取ることはなかなかできないため、ネットでの資料公開は大変にありがたい。遺漏・誤謬もあるかと推測される。厳しくご批評いただき、さまざまご教示いただきたい。

三章の崇福寺本・下巻・第一段と京大本・下巻・第二段の本文異同

について、本稿では京大本にある「べし。しからずは悉降伏す」の脱文を意図的に叙述を削ったと読んでみたが、目移りの可能性は否定できない。話末の助動詞「けり」の異同はともかく、崇福寺本「想て、各かたぐ」と京大本「そして、かたく」との異同も見逃せない。踊り字「ふく」と平仮名「く」はよく誤写、誤読される文字である。これらの異同は誤写であると結論づけるのが妥当かもしれない。しかし、問題なのは、このような細かい異同の精査が、これまで分析の対象から外れてきたことである。本来ならば全文をこのレヴェルで、全伝本の諸本校合を行うことが求められているのではないだろうか。これは『天神縁起』や『厳島縁起』などの作品も同様である。とくに『厳島縁起』は、現存する最古の貞和二年（一三四六）の書写繪巻以外に現在確認されているのは、一種の版本（明暦二年・一六五六刊）と江戸期の大量の写本群である。近世期に作られたテキスト群に真摯に向き合う必要性があるのだ。

注

- (1) 齋藤真麻理『妖怪たちの秘密基地 つくもがみの時空』（平凡社、二〇二〇年）。構成の都合により、注(1)が二箇所ある。
- (2) 筑真理子「研究ノート「付喪神繪巻」の諸本について」『博物館だより』十五号、岐阜市歴史博物館、一九九〇年。柴田芳成『付喪神』解題（『京都大学蔵 むろまちものがたり』第十巻、臨川書店、二〇〇一年）、注(1)齋藤著書。
- (3) 『栄花物語』巻二十八「わかみづ」に、「あらたまの年よりも若宮の御有様こそ、いみじうつくしうおはしませ。若水していつしか御湯殿まいる」とある。引用は新編日本古典文学全集による。

- (4) 注(2)柴田論文。以下、柴田芳成の先行研究という場合、この論文を指す。
- (5) 『閑吟集』一六一「かの邯鄲の仮枕 夢は五十年のあはれ世のためしまことなるべしや ためしまことなるべしや」、『太平記』卷二十五「黄梁一炊の夢の事」「楊竜山が日月を謝する詩に作つて曰く、少年より力めて学んで志すべからず張るべし、得失由来一夢長し、試みに問ふ邯鄲枕を欵つる客、人間幾度か黄梁を熟せしむ、と。これを邯鄲午炊の夢とは申すなり。かやうのあだなる事も夢の中には候ふぞかし」。いずれも引用は新編日本古典文学全集による。
- (6) 引用は新日本古典文学大系による。
- (7) 卒業論文では絵画についても比較検討を行ったが、本稿では紙幅の都合もあり割愛した。
- (8) 『太平記』卷三十二「神南山合戦の事」「今度の義兵をおこす事、全く余人のためならず。佐々木入道道普に無念を散ぜんがためなり。その志儀に叶って、いまだ陳をばさらざりけり。只今討たずば何の時をか期すべき。進めや物ども」。『太平記』卷十七「堀口還幸を抑へ留める事」「身を法体に替へ、罪なき死を賜らんと存じ候ひしところに義貞・義助等事を逆鱗に寄せ、日来の鬱憤を散ぜんと仕り候ふ間、休む事を得ずして、この乱天下に及び候ふ」。引用は新編日本古典文学全集による。
- (9) 成蹊本には「円融房無相」と書き入れがある。
- (10) 楊曉捷「絵巻の模写から何を読み取れるのか―『後三年合戦絵詞』模写群を手掛かりに」(『立教大学日本文学』一一一号、二〇一四年一月)。

